日本総研
The Japan Research Institute, Limited

日印経済安全保障研究会

インドの戦略的位置付けとは

この度、戦略的見地からインドに関する理解を深め、特に経済安全保障の観点から日印関係を更に深化させる方策を検討することを目的とし、15名ほどの有識者からなる「日印経済安全保障研会」を発足いたしました。第一回終了後の慶應義塾大学神保教授との対談を記事にしました。

（平松）みなさんご存知の通り、今インドは国際的な関心を集めています。先日もモディ首相が訪米してインドとアメリカの関係もますます強化されてきています。日本も、インドに対してこれまでもいろいろな形で協力をしてきましたし、日本とインドは戦略的な関係を深めています。そういうこともあって、当研究所ではいろんな有識者の方に集まっていただいて、特に経済安全保障という観点からインドについて深く議論するための研究会を立ち上げました。

今回は、第一回目ということもあってインドの戦略的位置付けにつき、様々な議論をいたしました。今回は第一回の会合のプレゼンテーションをしていただいた、神保慶応義塾大学教授に来ていただきました。神保さんありがとうございます。

（神保）どうぞよろしくお願いいたします。

（平松）ここ30年の世界を見れば、インドの重要性がますます高まるのは間違いないと思いますが、こういう中で神保先生として、インドの戦略的重要性をどういうふうに見ておられるか簡単にご説明いただけますでしょうか。

（神保）平松理事長のおっしゃる通り、世界におけるインドの位置付けは、間違いなく高まっていると思います。インド太平洋地域でも、世界の変化を動態的に見る必要があり、15年前のインドと今日のインドと、15年後のインドは世界の政治経済の位置付けが大きく変化します。例えばIMFの世界経済見通しでは、2027年に名目GDPでいよいよインドが日本を追い越し、第三位の経済大国になり、軍事費でもインドは今や世界第三位の軍事大国です。これは日本が岸田政権の元で、日本の防衛費をGDP比で2%目標に増

大する判断をしたとしても、インドには追いつくことはできません。これくらいインドの経済、そして安全保障における世界のプレゼンスは高まっています。そのインドが大国になっていくプロセスの中で、一体この地域や世界の中でどういう役割を果たそうとしているのか。

よく大国は国際公共財を提供する国と言われてます。これは例えば、国際法だったり、あるいは国際的な組織であったり、ルールを作ったりすることで、経済、通貨、安全保障の分野で他の国々の人たちが参加できる秩序を提供するということが一つの定義なんです。インドは果たしてそういう役割を果たそうとするのか、このあたりについては、実は専門家の中でもいろんな見方があるというのが大きな特徴なのではないかと思います。

（平松）やっぱりインドとの関係を考える際には隣国の大国である中国との関係というのが非常に重要になってくると思います。中国とインドの関係というのはかなり緊張をはらんだものであるわけで、今後ともインドがますます大きくなるにあたって、多くの国は中国との関係を見ながら、インドとの関係を高めていこうと思っています。日本もインドとの関係を強化してきていますが、やはりその背景には、中国という要素があると思うんです。インドもますます発展してきて、アメリカ、中国、それからインドという国が世界において最も影響力のある国になってくる中で、日本がこのインドとの関係、特に戦略的関係をどう進めればよいか考えるべきでしょう。

これまでも経済面とか、あるいは安保面とかで協力を進めてきましたし、インドは今ＱＵＡＤのメンバーでもあるわけで、戦略的な関係が深まってきたと思うんですけど、今後、さらにそういった関係を深めるために日本はどうすべきとお考えでしょうか。

（神保）インドは経済でも安全保障でも、台頭してきて、地域における影響力を深めてきました。そのインドが中国ともいろんな意味で競争的な関係にあり、国境をめぐる色々な対立もあれば、安全保障上の懸念もあるし、あるいは海上交通路といったインド洋における海洋進出における警戒感もある。この辺りは日本ともまたアメリカとも、共有する世界観を持った国として捉えることは、間違ってないと思います。現にインドは自由で開かれたインド太平洋というコンセプトに基本的に合意をしていて、海洋の安全をめぐる自由航行であったり、その安全保障であるということに関しては深く協力したいと思っているし、また経済安全保障という点においても、サプライチェーンの強靭化とか半導体をめぐる協力等の政策目標に関して合意をしています。日米印という枠組みでさらにオーストラリア、ヨーロッパ諸国を入れて、インドと一緒に協力していくという領域は間違いなく増えており、これを戦略的な資産として使わない手はないと思います。

ここからがおそらく問題です。インドが見る世界はインドを中心に同心円的に考えて行った方がいいと思います。東を見れば、そこにはＡＳＥＡＮがありオーストラリアがあり、そして日

本がありアメリカがあると、まさにこのインド太平洋の世界におけるインドは間違いなくあるわけです。でも北を見ればそこにはユーラシア大陸があり、そして中国、ロシアとの関係がある。西を見ると中東がありアフリカがあるということで、インドにとっての同心円というのはそれぞれが非常に重要な役割を持つということだと思います。

インドの外交はおそらく多重アイデンティティの管理にあって、間違いなくアメリカ、日本は大事なんですけれども、同時にインドはロシア、中国、ブラジルというＢＲＩＣＳの一員でもあるし、そしてヨーロッパとの関係も強化し、さらに言うといわゆる途上国のまとまりとしてのグローバルサウスという、途上国の声を代表するという問題意識も持っていることだと思うんですよね。ですから中国とインドは競争していますよね、一緒に中国をヘッジし、バランシングをしようというところだけで、インドを観ようとすると、あれっ、と思う場面に遭遇します。インドが我々と同じ土俵に乗って世界を見ていないという局面がこれまでも何回もあったし、これからもあるんではないかと思います。

（平松）神保先生がおっしゃる通りだと思いますよね。やっぱりインドから見てる世界というのと我々が見てる世界というのはかなり違うし、インドは決して自分たちの自主権だとか自律に対して他国に拒否権を与えない、という立場を強くとっていると思います。そういう立場をよく理解しながら、日本とインドの関係を進めていくということだと思います。さっきおっしゃった通り日本とインドで利害が一致するところがかなり多いですよね。安全保障の問題だとか、彼らが進めている先端技術の開発だとか、お互いが利益になる分野はたくさんあると思うので、そういうところを増やしていくことによって、まあ、インドが完全に我々と同じ立場をとるということは永遠にないとは思いますけれども、さはさりながら、日本とインド、あるいは日本と、アメリカ、インドが一緒になって世界の問題を解決するという姿を作っていくことは、おそらく日本のここ2、30年将来を考えた場合、すごく大事だと思うんです。そういう中でやっぱり経済界の人々と、特に新しい分野での日印の経済協力を一生懸命やっていって、インドの凄まじいエネルギーを日本の経済発展に繋げていくということが非常に重要だと思います。

今日は神保先生、ありがとうございました。今回は戦略面について深い議論ができましたので引き続き当研究会では様々なテーマについて議論を深めていきたいと思います。

（神保）ありがとうございました。